

さぬき・東かがわ市 研究のあゆみ

1 研究主題 主体的・協同的に学び合い、個の考えを深める国語科学習の在り方

2 研究活動の概要

- (1) 4月30日(木) 研究主題設定, 研究組織作り, 研究計画立案
- (2) 6月23日(火) 研究授業 さぬき市立さぬき南小学校
1年 「どうやってみをまもるのかな」
指導者 東部教育事務所主任指導主事
- (3) 9月2日(水) 「ともしび」作文審査会
- (4) 11月26日(木) 研究授業 さぬき市立長尾小学校
6年 「町の未来をえがこう」
「町の幸福論-コミュニティーデザインを考える」
指導者 東部教育事務所主任指導主事
- (5) 1月28日(木) 児童文集「はらっぱ」の編集作業

3 研究内容

・ 6月の授業では、国語を楽しむことができるような授業を意識して構成されていた。挿絵や動画、先生からの手紙などを提示して意欲喚起を図る工夫がなされていた。活動の順番も目に見える形で提示されており、言語活動に見通しをもつことができるよう配慮されていた。

また、指導の中で、教師と児童の関係がうまくいくためには学習規律の徹底が大切であり、基礎的・基本的な学習規律を大切にしよう御指導いただいた。また、教材化という観点と教材文のもとになっている書籍を調べることの重要性についても、ご示唆いただいた。

・ 11月の授業は、教材文で学習した事柄をもとに、各グループで自分の町の活性化についてのプレゼンテーションを考えるのものであった。互いのプレゼンテーションを見合い、意見をもらうという言語活動が中心であった。その際に、各グループがチェックしてもらいたい点を伝えてからプレゼンテーションをするという手法をとることで、自分たちの活動を主体的に考えるよう促した。

また、御指導の中で、授業提案にあった「発表者がチェックしてほしいこと」を明確に伝えている点について、自分たちの課題を把握しているということで評価をいただいた。また、チェックした後の活動の在り方として、気付いた点を発表するだけでなく、互いに質問できるような場を設定することで、双方向でプレゼンテーションについて話し合うことができたのではないかと御指導をいただいた。

4 県の研究との関連

【今年度の研究での成果】

- ・ 6月，11月の授業を通して，児童の目線から言語活動を構想した。それにより，児童が主体的に学習にかかわるためには，魅力的な言語活動を設定することが重要であることを確認できた。

【今年度の研究での課題】

- ・ 魅力的な言語活動のおかげで児童の意欲は高まっていた。しかし，単元を貫く言語活動のもつ力に依存してしまっていた。今後は交流のさせ方や，視点の与え方について児童が必要感をもって主体的に学習活動が行える方向性を探りたい。

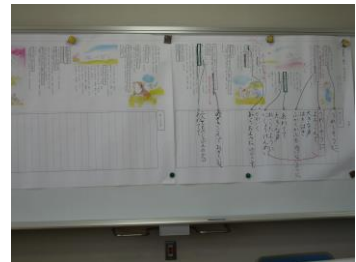
小豆郡 研究のあゆみ

- 1 研究主題 「ともに学び合い、一人ひとりの考えを深める国語科学習の展開
―単元を貫く言語活動の中で、子どもの関わりを促す支援の工夫―」
- 2 研究活動の概要
 - (1) 4月24日(金) 土庄小学校 研究組織作り, 研究計画の立案
 - (2) 5月29日(金) 土庄小学校
2年教材「名前を見てちょうだい」を使つての模擬授業
指導者 小豆島町立苗羽小学校校長
 - (3) 9月16日(水) 安田小学校
授業研究 2年
「場面や登場人物の様子の違いが分かるように友だちにお話を音読しよう」(『名前を見てちょうだい』)
指導者 香川県教育センター主任指導主事

3 研究内容

(1) 1回目の研修について

2回目の研修で扱う教材を実際に使って模擬授業をした。研究部員が授業・補助をしながら提案した。物語文の扱い方, 導入を大切にした単元計画の立て方, 実際の場面を通しての指導法など具体的に考えた。指導者より適宜指導を受け, 物語文の指導法が具体的に分かり, 大変有効な研修となった。



(2) 2回目の研修について

「場面や登場人物の様子のがいがわかるように友だちにお話を音読しよう」(『名前を見てちょうだい』)(東京書籍2年下)の研究授業を行った。

1回目の研修で得た成果を元に, 授業者が児童の実態に合わせて指導法等を変更しながら授業を行った。児童の読みを深めるために場面ごとに, 拡大コピーをして掲示したり, それと同じ形の書き込みが出来るワークシートを使ったりするなど工夫があった。また, 音読を通してグループで読みを深めていくことが, 児童の読み取る意欲を高めることにつながることが分かった。学年による読解の系統性を意識し, 交流の在り方を具体的に検討できた。



(3) 成果と課題について

- ・模擬授業は部員が主体的に研修に参加する形であり, 有効であった。また, その中でテーマについての理解も深められた。
- ・1回目の研修では, 付けたい力と言語活動へ誘うようにするために, 児童が自分の課題意識をもって自分で解決していこうという気持ちをもたせる発問をしていかなければならないことが分かった。そして, 板書には「何の力を付けるのか」を必ず入れるようにする。読み取っていく際に, 教師が認めたり, 問い返したりすることで表現が十分でない考えを言語化していく。また, 児童の発言をもとに付けた力をまとめていく。文学は連続性のあるものなので, 教材文を1枚ものにする事で視覚化でき, 分かりやすく

なることなどが分かった。

- ・ 2回目の研修では、県教育センターの主任指導主事に、国語科における言語活動の充実の4つのポイントを具体的に教えていただいた。本単元で付けたい力を見極めるために、年間計画で前後の授業のつながりを考え、どのように位置付けているのかを確認する。また、どの学年もファンタジー作品があるが、作品の構造を教材研究しておき、指導のねらいを実現するのにもっともふさわしい言語活動を選定する。学年に応じて言語活動の遂行に必要な能力を、単元を通して指導する。主体的思考・判断を活発にするために、集団で解決するための課題を設定し、言語活動を行うことに達成感を得られるような授業の手立てを工夫することなどが分かった。
- ・ 今後、主体的・協働的な学びをつくる課題の持たせ方、発問・指示の在り方についての研修もしていきたい。

4 県の研究との関連

【今年度の研究での成果】 練り合う必要感のある、学習場面の設定

2年単元「場面や登場人物の様子の違いが分かるように友だちにお話を音読しよう」(『名前を見てちょうだい』)の研究授業では、自分が選んだ音読したい場面の読み方を、友だちと一緒に工夫するという言語活動を展開した。様子を表す言葉を見つけ、それに合わせて音読したり、時には動作化を取り入れたりしながら、場面や登場人物の様子を比べていった。どの表現からどんな様子を想像したのか結びつけていく活動を繰り返すことや、場面对比させながら読んでいくことで自分たちの読みを深めていくことができた。

【今年度の研究での課題】 学び合いの仕方

グループで読み方を話し合い、練習して全体で交流していったが、深め合う交流までには至らなかった。発表グループとフロアグループに効果的に話し合いを行わせる交流をどう高めればよいか、学年の発達段階を考慮しながら明らかにしていきたい。

高松市 研究のあゆみ

- 1 研究主題 真に生きて働く国語力を育てる国語科授業の創造
～単元を貫く言語活動を位置付けた授業づくり～

2 研究活動の概要

(1) 6月11日(木)〈第1回研究授業・討議〉

- 北ブロック** 6年 新聞の投書を読んで意見文を書こう
「新聞の投書を読み比べよう」
3年 「美月のヒミツ紙芝居」を2年生に紹介しよう
「ゆうすげ村の小さな旅館」

- 南ブロック** 4年 新聞の記事を比べて書き方の違いを見つけよう
「みんなで新聞を作ろう」
4年 「のぶよとわたしの物語」を作って、感想を伝え合おう
「走れ」

(2) 10月29日(木)〈第2回研究授業・討議〉

- 北ブロック** 4年 自分たちの暮らしの中の和と洋を見つけよう
「暮らしの中の和と洋」
4年 ある人物になったつもりで ～なりきり物語を書こう～
「ある人物になったつもりで」

- 南ブロック** 4年 報告します！ 10才のみんなの生活
「報告します！ 10才のみんなの生活」
6年 物語を作ろう ～絵本作家になって、My絵本を出版しよう～
「物語を作ろう」

3 研究内容

【北ブロック】

第1回

〈3年の実践〉(花園小)

◎学習の目的と単元の見通しを明確にした単元構想

- ① ゆうすげブックや背面掲示、前時までの学習の流れの掲示など学習計画の支援が行き届いているため、児童が見通しをもって学習に取り組むことができていた。
- ② 単元を貫く言語活動には、言語活動自体に能力としての側面、到達すべき能力を育成する方法的側面が含まれている。付けたい力を付けるための言語活動であることを忘れてはならない。
- ③ 中学年においては、気持ちの変化を場面の移り変わり、地の文や行動、会話などから関連的にとらえて読み取っていく力を付けていく必要がある。

◎1単位時間における授業の指導過程の工夫

- ① グループ学習では、話し合いをスムーズに行うために、話し合いのマニュアルを作ったり、話し合いの仕方のモデルを示したりなどの支援があるといい。
- ② 相手を思う気持ちとは、具体的にどういうことなのか、教材文の言葉とどうつないでいくのかを板書に残すなどしておき、教師がゆさぶりをかけたり問い返したりするとよかった。
- ③ 「個で考える→グループで考える→全体で考える」の学習のあとに、再度「個で考える」場を設定すると自分の考えがより深まる。

〈6年の実践〉（亀阜小）

◎学習の目的と単元の見通しを明確にした単元構想

- ① 単元を貫く言語活動がきちんと設定されている。投書を書きたいという願いから、教材文を読み、表に表すことによってどう書くかが分かる。目的があるので、主体的に活動できる。
- ② 導入では、教材文をすぐに与えるのではなく、子どもが書きたいと思う段階で意味のある出会いをさせるとさらによい。
- ③ 見つけた工夫を自分の意見文に取り入れるため、表にして比べやすくしている。色分けをして、重点が分かるようになっている。

◎1単位時間における授業の指導過程の工夫

- ① グループで対話することによって自分の意見が進化したことが分かるようなワークシートの工夫があればよかった。（〇〇さんの意見を聞いて・〇〇さんと話し合って等）
- ② 1時間の授業で何をつかませたいかがはっきりしている。付けたい力がはっきりしていると、それを目指して授業を組み立てていけるので、ぶれずに学びのある授業につながる。
- ③ 学習課題である「相手を説得する書き方を学びたい」という意識の流れが、授業の終末まで続くように教師は配慮する必要がある。

第2回

〈4年の実践〉（高松第一小）

◎学習の目的と単元の見通しを明確にした単元構想

- ① ペープサートを用いることで、それぞれの立場から考えられる。書くことに苦手意識がある児童には効果的であった。
- ② どこまでを個人で考えて、どこからペアで考えるのかを明確にしておく児童が見通しをもって学習に取り組める。
- ③ 自力解決はグループ→全体→教師のまとめ→もう一度自分で、という流れにするとよい。

◎1単位時間の授業における指導過程の工夫

- ① ペアの書いた文章を見て、一人称の文章になっていないことを指摘する児童がいた。児童の意識の中に一人称で書くことがしっかり根付いていることがすばらしい。
- ② ペアの組み方に教師の意図性を入れ、多様性を学ぶことにつなげるといい。
- ③ 支援の必要な児童が、ペープサートを有効に活用しながらペア交流し、会話のメモがびっしり書けていた。自分たちで考えてできていたので、児童主体の授業になっていた。

〈4年の実践〉（栗林小）

◎学習の目的と単元の見通しを明確にした単元構想

- ① 「読むこと」から「書くこと」へという活動の流れを子ども一人一人がきちんと把握しており、教材文から比較したりまとめたりするときに使う言葉にこだわって書きぶりをおさえていた所がよかった。
- ② 和と洋それぞれの良さだけに焦点を当てていたが、和の不具合な点が実は洋の良さになっているという見付け方もあったのではないかな。
- ③ 単元を貫く言語活動として、こま切れにならないような仕掛けが必要。本文の読み取りから書くことを意識し、書くことで再度読みを深められるように、自分の紹介文と本文とを行ったり来たりしながらつなげていくようにすることが大切である。

◎1 単位時間の授業における指導過程の工夫

- ① 「はしとスプーン」「ゆかたとパジャマ」「ふろしきとカバン」の実物を持ってきていた子がたくさんいた。和と洋の比較がしやすく、有効な支援だった。和と洋のものの違いを実際に比較しながら説明している場面があった。
- ② 和を赤い付箋、洋を青い付箋で色分けして、上下段でまとめて整理していたので分かりやすかった。
- ③ 国語の授業として学習するためには、素材や作り（見えやすいもの）からいつもの使い方、作り方（見えにくいもの）へまとめていくということが対比してとらえる観点になる。それを学ぶことで、これからの学習につながり、使える力を獲得することになる。

【南ブロック】

第1回

〈4年の実践〉(前田小)

◎学習の目的と単元の見通しを明確にした単元構想

- ① 書く力を高めるために、構成の段階に重点を置いて指導してきている。記事を読み比べることで、理解を深められると考えて指導ができていた。
- ② 「いつ、どこで、だれが、どうした」など、4年生での既習内容をきちんとおさえ有効に活用することができていた。
- ③ 国語の授業で学んだことを、社会科や総合的な学習の時間での新聞作りで活用することを考えて学習計画が考えられていた。

◎1 単位時間の授業における指導過程の工夫

- ① 日記の書き方と新聞記事の書き方を比較し、表現の違いに視点を向けられるように支援を行っていた。
- ② 遅れて進む児童も友だちからの意見をもらっていたので、ジグソー学習での学び合いが有効であった。
- ③ 「なかま新聞」のカラーでの拡大提示やアドバイスカード等、子どもたちが困ったときに自立解決できるような支援も多くあったことがよかった。

〈4年の実践〉(鶴尾小)

◎学習の目的と単元の見通しを明確にした単元構想

- ① 背面掲示の前時までの学習の流れや教室横の学習計画の支援があったので、子どもたちが見通しをもって学習に臨んでいた。

- ② ワークシートを始めから1冊にしていることで見通しをもって、意欲的に学習に取り組む手立てとなっていた。
- ③ 毎時間、手紙を書くことによって自分とのぶよを結び付ける手立てとなり、子どもたちがこの物語をより好きになっていったと感じた。

◎学習の目的と単元の見通しを明確にした単元構想

- ① 話形が掲示してあり、毎時間交流する時間をもつことで友だちの考えをしっかりと聞いて、感想や質問を言うことができるなど、ペア交流が上手く成立している。
- ② 中心人物の気持ちの変化を3つのシールの色で表すことにより、自分も友だちも変化が分かりやすい。また、どうしてそのように考えたのかという理由をしっかりと伝え合うこと通して、友だちの考えを積極的に聞くことができている。
- ③ 交流することによって、自分の考えを変えることができるということを子どもたち自身が実感できる。

第2回

〈4年の実践〉（川添小）

◎学習の目的と単元の見通しを明確にした単元構想

- ① 意欲的に取り組んでいたのも、子どもたちが自主的に時間を作り出し、分かりやすく発表することができていた。
- ② タイムスケジュールやホワイトボードの一人一人のめあての掲示などの支援がしっかりしていた。

◎1単位時間の授業における指導過程の工夫

- ① 話し方のひな型の掲示もよかったが、先生の表情や話し方がお手本になって、時間への意識も感じられた。
- ② 声の高さや、間の取り方など、本人も分かっていることは、ボイスレコーダーでできるが、動画を見て、無意識の自分の行動を意識できたことにタブレットの意味がありよい。
- ③ 機器を取り入れた分、時間ロスがなく雰囲気をこわさず進められていたし、タブレット無しでも話し合いができていた。

〈6年の実践〉（林小）

◎学習の目的と単元の見通しを明確にした単元構想

- ① 「マイスタディ」（児童の補充的学習と自主学習を支援するために時程に組み込まれた時間）との連携もあり、目的や相手意識が明確にされた単元構想であった。
- ② 6年生の「書くこと」の学習として、今までに習ったことを生かしての学習であったので、低学年からどのように積み重ねていけばよいのかを考えるきっかけとなった。
- ③ グループで構成を考える時間が、学び合いとして大切な時間となっていたが、少し時間がかかり過ぎていたので、もう少し整理し、実際に自分の物語を書く時間を長く確保すればよかった。

◎1単位時間の授業における指導過程の工夫

- ① 子どもたちがグループで学習をするときに、しっかり自分の考えを話す子、それを聞いて

まとめる子、友だちの疑問に答える子等自分の役割をしっかりと果たして学び合うことができていた。

- ② 構成メモを書くための手立てとして、マップや付箋を活用すると話し合いも活性化する。箇条書きをすることに苦手意識をもつ児童にとっても、それらが手がかりになり有効である。

4 夏季研修会より

研修Ⅰ 「言語活動の充実」 高松市立古高松小学校

○国語科における「言語活動の充実」とは

- ①本単元で付けたい力を見極める
- ②付けたい力にぴったりの言語活動を選ぶ
- ③単元を貫いて位置づける
- ④「大好き」「はてな?」「伝えたい」を生かす

○実践例として 「お手紙」 2年

単元を貫く言語活動として『場面絵』



- | | |
|--|---|
| <ul style="list-style-type: none">・ 目的がはっきりしており、単元や授業の見通しがもてる。
(明確な学習過程)・ 児童主体の、児童の思いを実現するための必然性がある。・ 単元で「付けたい力」と密接に結びついている。・ 教材の特徴や特性が生かされている。・ 学校、児童の実態に即している。 | 等 |
|--|---|

研修Ⅱ 子どもの「話し合いたい」意欲を高める指導の工夫

高松市立円座小学校

○子どもたちが「しゃべりたい」「話したい」という気持ちにする

ペア対話→全体→課題解決



話し手	・・・言うことは短く 「～だよね」「～でしょう」
聞き手	・・・あいづち、反応して聞く 相手の思いを受けとめる

←支持的な学級の
風土づくり

○演習 ② クルルが飛べなくなった理由を考えよう ～「風切るつばさ」から～
自分の考えをつくり、ペア対話をする

講演 香川大学教育学部教授 佐藤明宏先生 「国語科研究授業のつくりかた」

内容 ○今、求められている学力観

基礎力+思考力+実践力（含：人間関係調整力）

○研究授業に求められるもの

- ・ 最先端の学力育成を目指した提案性のある授業

- ・子どもの確かな「読み書き話す聞く」力を育てる安定した授業
- ・研究授業が可能な学級経営

佐藤先生の著書「研究授業のつくりかた」に即して、国語の研究授業を展開する上で大切にしたいことについて、具体例を挙げながらわかりやすく講義をいただいた。

5 県の研究との関連

【今年度の研究での成果】 練り合う必要感のある学習場面の設定

- ・ 4年単元「自分たちの暮らしの中の和と洋を見つけよう」の授業研究では、「はしとスプーン」「ゆかたとパジャマ」「ふろしきとカバン」など実物を持ってきた児童が多く、実際の比較を通して考えを練り合うことができた。付箋を色分けして使うことで考えをまとめたり整理したりでき、考えを深め合う手立てとして有効であった。

【今年度の研究での課題】 学び合いの形態

- ・ どの授業研究でも、個で考える、グループ学習、ペア学習など形態の工夫が凝らされていた。どこまでが個で考える場面か、どこがペアやグループで練り合うところかを明確にしていくことで、見通しをもった学習を進めることができる。「個で考える→グループで考える→全体で考える」の学習のあとに、再度「個で考える」場を設定すると自分の考えがより深まるという指導もあり、多様な形態を探っていくことの大切さが確認された。

坂出市・綾歌郡 研究のあゆみ

- 1 研究主題** ともに学び合い、一人ひとりの考えを深める国語学習の展開
～単元を貫く言語活動の中で、子どもの関わりを促す支援の工夫～

2 研究活動の概要

- (1) 4月15日 研究組織作り，研究主題の設定，研究計画立案
(2) 6月 3日 研究授業①（綾川 羽床小学校）
 2年「親友ってどんな友だち？『お手紙』を読んで考えよう」
(3) 10月28日 研究授業②（坂出 東部小学校）
 3年「世界の物語をしょうかいしよう ～はりねずみと金貨～」

3 研究内容

(1) 研究授業①より

本単元では，場面から読み取ったことをもとに，登場人物に宛てて手紙を書く活動を設定することによって，人物の会話や行動に着目して，どんな気持ちなのかを想像豊かに読み取る力を培うことをめざして学習を展開していった。

本時は，第一場面の読み取りであった。2人の会話文を上下に色分けして配置するなど，板書が構造的になされており，児童は2人のやりとりを整理しながら，本文の叙述を基に想像を広げ，考えを交流することができた。授業の終末では，登場人物に宛てて手紙を書く活動を行った。導入では，かえるくんの気持ちがなぜ変わったのか想像できなかった児童も，読み取りの際に友達の考えを聞くことで想像が広がり，がまくんを思うかえるくんの気持ちを手紙に書くことができていた。

(2) 研究授業②より

本単元では，児童が主体的に読み，必要感をもってあらすじをまとめるという活動が展開できるように，「世界の物語を紹介しよう」という単元を貫く言語活動が設定されていた。教材文を使ってあらすじのまとめ方を学び，さらに，自分の紹介したい本をもとに目的や必要に応じたあらすじのまとめ方を学んでいった。本時は，あらすじのまとめ方を学ぶ際に見つけたポイントを基に，教師の書いた紹介カードを見直し，より分かりやすくする方法を共通理解した後，同じ国の物語を選んだ友達同士で読み合い，よさや改善点について交流した。

自分であらすじをまとめてそれを紹介文にしたり，さらにそれを見直したりすることは，児童にとって難しい。しかし，スモールステップで学習したり，細やかなワークシートを準備したりすることで，どの児童も主体的に取り組むことができた。また，言語活動が単元を貫いて設定されていたので，児童が終始意欲的に学習に取り組むことができていた。

4 県の研究との関連

【今年度の研究での成果】

練り合う必要感のある，学習場面の設定

- 研究授業①では，読み取りに入る前に，場面ごとに児童が疑問に思ったことをワークシートに書き出す活動を行った。本時の学習課題も，その疑問から設定されたものであった。教師が与えるのではなく，児童の「知りたい」を基に学習課題を設定することで，児童の主体的に問題解決しているという学習意欲が喚起されていた。

個別支援の在り方

- ・ 研究授業②では、子ども一人ひとりがお気に入りの世界の物語を選ぶことができるように、13の地域から90冊の物語を教師がおすすめの物語として紹介した。その際、読書カードを準備し、読んだ物語にシールを貼る活動を行ったので、どの児童もたくさんの物語を読み、その中からお気に入りの物語を選ぶことができていた。教師も全ての物語を読んでいたの、紹介文を書くときに、苦手な児童に対してアドバイスをを行うことができた。また、書くことが苦手な児童に対して、ヒントカードを準備したり、全てできている児童に対して、レベルアップの課題を設けたりして、どの児童も意欲的に学習できるようにした。
- ・ 研究授業②では、グループ学習を行う際に、読んだり書いたりすることが苦手な児童だけが集まらないように、グループ構成を工夫することで、どのグループも効果的な交流ができていた。さらに、それでも意見が出ないときのために、教師も事前に全員分のアドバイスを書いた付箋を準備し、様子を見ながら付箋を貼っていった。この支援は、交流の手助けとなっていた。

[今年度の研究での課題]

学び合いの形態

- ・ 研究授業①では、教師と児童のやり取りが主になってしまい、学び合いの形態については課題が残った。事後討議で、低学年の児童が自分たちの力だけで友達と話し合うのは難しいが、3人グループを作り、2人が役割読みをしながら考えを話し合い、それを残りの1人が客観的に見て考えるという活動も効果的なのではないかという意見が出された。

丸亀市 研究のあゆみ

1 研究主題 ともに学び合い 一人ひとりの考えを深める 国語科学習の展開

2 研究活動の概要

- (1) 4月15日 城乾小学校 研究組織作り，研究主題の設定，年間計画作成
- (2) 6月 3日 城東小学校 授業研究・討議
 - 低学年部会 2年 「1年生にペープサートを見せよう」
—『お手紙』—
 - 高学年部会 6年 「物語を読み深めよう」
—『風切るつばさ』—
- (3) 12月2日 城乾小学校 城南小学校 研究授業・討議
 - 低学年部会 1年 「いろいろなおはなしをよもう」
—『おとうとねずみチロ』—
 - 高学年部会 4年 「本の中の幸せ探し～幸せについて考える読書会～」
—『世界一美しいぼくの村』—

3 研究内容

- ・ 2年「1年生にペープサートを見せよう」では，1年生にペープサートを見せるという相手意識や目的意識をもたせることで，主体的に学習に取り組むことができるようにした。また，よりよいペープサートを行うために，グループで話し合う時間を確保した。
討議では，①本単元で身につけさせたい資質や能力について，②ペープサートで伝えるという言語活動を行うためには何が必要かを児童に考えさせること，③「今日は，これができるようになったよ」といったふり返りの大切さ，④児童同士の交流時の観点を明確にすること等について話し合い，共通理解を図った。
- ・ 6年「物語を読み深めよう」では，友情をテーマに物語の感想を伝え合う言語活動を設定した。そのために，カララの視点で物語をリライトしたり，人物関係図を書いたりすることを通して，じっくりと物語と向き合い，物語の世界を想像することができるようにした。また，学び合いから各自の考えを深めることができるように，各自が考えたカララの気持ちを交流する場を設定した。
討議では，リライトをさせる目的とリライトをさせるときのポイント，人物関係図の活用の仕方，学習指導過程のパターン化等について話し合い，共通理解を図った。
- ・ 1年「いろいろなおはなしをよもう」では，単元を貫く言語活動として登場人物の好きなところを紹介し合う活動を設定した。また，実態から考えられる児童のつまずきを事前に考え，それを支援するために，着目させたいキーワードを別の言葉で提示したり，動作化を取り入れたりした。
討議では，着目させたいキーワードやペア活動の取り入れ方等について話し合い，共

通理解を図った。

- ・ 4年「本の中の幸せ探し～幸せについて考える読書会～」では、総合的な学習の時間との関連を図った単元計画を設定した。また、児童がかかわり合い、協働的に学び合うことができるようにするために、ペアやグループで話し合う活動を取り入れた。

討議では、学習課題と子どもの意識との関連のさせ方やグループ活動の取り入れ方について話し合われた。

4 県の研究との関連

【今年度の研究での成果】 学び合いの形態・学び合いの仕方

- ・ どの授業研究でも、ペアやグループで話し合う活動が取り入れられた。全体での学び合いだけでなく、少人数であれば自分の考えを発表できる児童が多いという児童の実態に応じた形態の学び合いが取り入れられたので、児童の意欲化が図られた。
- ・ 6年「物語を読み深めよう」では、人物相関図を使ってペアでの話し合いを行った。また、4年「本の中の幸せ探し～幸せについて考える読書会～」ではホワイトボードを使って話し合いの内容をまとめた。各児童の思考を視覚化することにより児童同士の活発なかかわり合いが生まれ、学び合いが深まった。

【今年度の研究での課題】 学習場面の設定

- ・ お互いの考えを練り合い、よりよいものを求めていく意欲を子どもたちにもたせるためには、学習課題を何にするかを考える必要がある。知的好奇心が高まる学習課題の設定についてどのようなものがよいか考えたい。

仲多度郡・善通寺市 研究のあゆみ

1 研究主題 ともに学び合い、一人ひとりの考えを深める国語科学習の展開

2 研究活動の概要

- (1) 4月22日 研究組織作り，研究主題の設定，計画立案
- (2) 6月9日 第1回研究授業 2年「お話を読んで，かんそうを書こう」
(中心教材「スイミー」 光村)
- (3) 7月24日 「新聞記事の書き方を学ぶ」 指導者 四国新聞社編集局員
- (4) 11月19日 第2回研究授業 1年「じどう車カードを作って友だちに紹介しよう」
(教材文「じどう車くらべ」 光村)

3 研究内容

第1回研究授業では、「人物の行動や場面の様子などについて，想像を広げながら読む。」「文章の中の大事な言葉や文を書き抜き，それをもとに感想を書く。」という読む能力の育成を目標とした授業が提案された。

第1次で教師手製のレオ＝レオニの他作品のブックカバーをモデルに、「お話のブックカバーをつくろう」という学習の見通しをもち，第2次でブックカバーに適した「スイミー」の変容が見られる場面をスイミーの気持ちに寄り添いながら読み，第3次に読み取った中からブックカバーにしたいところを決め，ブックカバー制作，作品の交流と，児童の主体的な学びを意図した単元構成だった。

本時では，繰り返される「考えた」という言葉を取り上げ，「スイミーはどんなことを考えたのだろう。」と，スイミーが考えた内容を，叙述をもとに想像し，それを交流した。児童は考えの根拠となる叙述に線を引き，それを基に自分の考えを意欲的に発表していた。また友達との交流を通して自分と異なる読みを知り，自分の読みを深める児童も見られた。さらに，前時までの学習を想起して，物語の文脈の中で考えることができた。後の討議では，さらに児童が主体的に学んでいくためにはということで，学習問題の在り方（代案として「スイミーはどうして何回も考えたのだろう。」が挙げられた。）や，本時の学習問題と「ブックカバー作り」という言語活動が合致していたか，本単元の言語活動として「ブックカバー作り」が適しているのか等について話し合った。

第2回研究授業では，「事柄の順序を考えながら読み，大事な言葉や文を書き抜くこと」を指導事項の中心に据えた授業提案がされた。自動車の「しごと」と「つくり」について説明した「じどう車カード」を作り，友だちに紹介することを言語活動として設定していた。

第1次で教師手製の「じどう車カード」から学習課題をもち，第2次で教材文を読んで「しごと」と「つくり」に着目してカードを書き，この学習を生かして第3次では，図鑑を調べ，自分の気に入った自動車のカードを書き，それを友達に紹介し，互いのカードのよさを見付け合うという単元構成だった。

本時は，教材文の学び（「しごと」と「つくり」の関連性を読む）を生かして，はしご車の「じどう車カード」を書くという学習活動だった。はしご車の「かじのときにはたらくじどう車です。」という説明と，挿絵を手がかりに「しごと」と「つくり」を見付け，「しごと」に合った「つくり」を選んで，カードに書いた。常に教師が「しごと」に合った「つくり」になっているかを児童に問う姿勢が見られ，児童もそれを意識して考えたり，友達と交流したりしていた。後の討議では，学び合いの必然性のある場が設定されていたか，学び合いのしかたはどうだった

たかを中心に話し合った。火事の時高いところからにげおくれた人を助けるために必要な「つくり」は何かという視点に立ち返ることで、学び合う必然性が生まれ、価値ある学び合いになったのではという意見や、1年生という発達段階からは、「つくり」を選んだ理由をペアで質問し合ったり、その後全体で交流し合ったりする学び合いの形態が適しているという意見が出され、児童の主体的な学び合いをどう生み出すかについての意見交流ができた。

4 県の研究との関連

【今年度の研究での成果】 練り合う必要感のある、学習場面の設定

どちらの授業研究でも、第1次から児童が学びのゴールを見通して学習に臨めるよう、単元構成されていた。また、学び合うことで、どのように考えが深まっていくのか交流の価値を児童自身が認識できるようになった。さらに児童同士の学び合いが主体的にできるよう、解決したいと思う学習課題の設定や、自分と異なる考えとの出会いを意図的に設定していくことの大切さを共通認識できた。

【今年度の研究での課題】 学び合いの形態

どちらの授業研究でも、ペア対話から全体交流へと進む学び合いの形態が取られていた。低学年という児童の実態を考えると適した形態だが、中学年、高学年という発達段階に応じた形態の在り方や、活動に応じた効果的な形態についても探っていきたい。

三豊・観音寺市 研究のあゆみ

1 研究主題 「確かな学力の育成」

— 自分の考えをもち、伝え合い、学び合おうとする子どもの育成 —

2 研究活動の概要

- (1) 4月28日(水) 研究組織作り，研究主題の設定，研究計画の立案，ノート指導について
(豊中支所)
- (2) 7月24日(金) 三観小研国語部夏季研修会(観音寺市立観音寺小学校)
 - 第3学年「世界に一つ，私の創作絵本」実践発表
 - 講演「確かな学力を育てる国語科の授業づくり
—中学年の「読むこと」の実践を中心に—

3 研究内容

- (1) 第1回の研修会より
「ノート(ワークシート)指導について」(さぬきの授業 基礎・基本)の提案があり，板書計画とノート(作成)計画を立てることで，見通しをもって学習に臨むことができること，ノート検定やノート展覧会を実施することで，書き方の基本や工夫を学ぶことができること，「わくわくスペース」を設定することで，授業のポイントや友だちとの交流の足跡が整理でき，既習事項の確認ができることなどを学ぶことができた。
- (2) 三観小研夏季研修会より
 - ① 第3学年「世界に一つ，私の創作絵本」の実践からは，「児童が主体的に取り組み，確かな力を身につける国語科学習の創造」について提案発表があった。この提案から主に四つのことについて学んだ。一つ目は，指導事項を具体的かつ明確に焦点化すること。二つ目は，情報(絵)を比較し関係性を提示することで，創造の方向性をもたせることができること。三つ目は，児童の実態を考慮した多様な学習展開を準備すること。四つ目は，本物の絵本制作に取り組み，達成感や意欲を高めることである。今後の実践に生かせる貴重な提案であった。
 - ② 講演「確かな学力を育てる国語科の授業づくり —中学年の「読むこと」の実践を中心に—」からは，児童が目的をいつも意識して教科書教材を読み自分の表現に適用することで，主体的な態度で学びながら知識技能を身に付け，思考力を育成することができるということを学んだ。

4 県の研究との関連

【今年度の研究での成果】 学び合いの仕方

- ・ 3年単元「人物を考えて書こう『世界に一つ，私の創作絵本』」の授業実践では，自分が書いた物語を推敲する段階で，「学び合い」を行った。前単元「サーカスのライオン」で抜き出し，5つに分類した様子を表す言葉をもとに，友達の書いた物語に類別の観点によって色分けした付箋を使ってアドバイスをし合うという活動を行った。その結果，自分で修正した文章に，友達からのアドバイスを加え，より豊かに表現することができた。

【今年度の研究での課題】 個別支援の在り方

- ・ 発想につまずく児童に対しては，友達や教師との問答の機会を設け，個々の児童が自分のイメージを広げることができた。物語創作への興味関心や書く能力の高い児童に対しては，より自由な発想をもとに，物語の設定段階から自由度を増した学習方法を選択できるような単元を構想することも重要であると考ええる。